九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

[035]九州大学総合研究博物館ニュース

https://hdl.handle.net/2324/4377880

出版情報：九州大学総合研究博物館ニュース. 35, pp.1-, 2021-03-23. The Kyushu University Museum
バージョン：
権利関係：

NEWS

The Kyushu University Museum

九州大学総合研究博物館ニュース

No. 35

March, 2021

伊都に新ギャラリーがオープンします

大学の研究成果を公表し知的交流を促進する施設として、伊都地区に「フジイギャラリー」がオープンします。5月のプレオープン、10月の本格オープンに向け、現在博物館が準備を進めています。一方、箱崎キャンパス跡地では、旧工学部本館や旧本部事務庁舎の一帯が九州大学の「箱崎サテライト」として残り、博物館がその中心的役割を担う方向性が明らかとなりました。4月からは、館長も人文科学研究院の宮本一夫教授へバトンタッチいたします。20周年の節目を経た博物館の、これからの活動にご注目ください。

総合研究博物館第8代館長　緒方 一夫

ISSN 1346-6801

新ギャラリー、伊都キャンパスに出現！

三島 美佐子　開示研究系・准教授／米元 史織　開示研究系・助教

伊都キャンパスの椎木講堂と中央図書館の間の傾斜地に“何か新しい建物が建っているなあ・・・”と、気になっていた方もおられたことでしょう。それは昨年10月に竣工した「フジイギャラリー」です。ちょっと特徴ある外形を持つこの白い建物、大きな両親の真ん中で両手を繋いでもらっている幼な子のような可愛らしい佇まいです。

この施設は、本学法学部の卒業生である藤井徳夫様（イフジ産業株式会社の取締役創業者会長）のご寄付により、建設されました。設置場所が椎木講堂と中央図書館の間になった理由には、適度なスペースだったことに加え、両者の間に人の流れを生み出したいという大学側の期待があるようです。

竣工したばかりの建物は化学物質や水分を多量に含んでいるため、建物の竣工後1～2年間は、それらを揮発し乾燥させる「枯らし」が必要です。そのため現在はまだ開館しておらず、3台の除湿機をフル稼働中です。今後皆さんにも立ち寄って頂けるようになる「プレオープン」は来年度5月から、展示を伴う本格的なオープンは10月から、それぞれ予定されています。

このギャラリー自体は“当館のもの”ではありませんが、本学から当館が当面の運営を任されました。せっかく「研究博物館」である当館が運営を担うからには、単なる「陳列空間」ではない大学らしい工夫をしたいところです。そこで、このギャラリーの運用コンセプトには、当館のこれまでの博物館活動の中で得てきた知見や、本学の特色ある大学院「ユーザー感性学専攻」での知見を盛り込むことにしました。

その一つが、このギャラリーを『本学における「触発を促し着想する場」として位置づけ、そのための体感・体験を創り出す』というものです。もう一つは、『新たな“何か”が生み出されるような“越境”と“交流”を促すために、異分野の学生・教員および異なる部署の職員などが「遭遇」する仕掛け』を組み込むことです。もちろん一般公開施設なので、学外からの多様な来場者や事柄も、「遭遇」の重要な要素の一つです。

この「フジイギャラリー」は、まだその途上にある伊都キャンパスの街づくり（タウン・オン・キャンパス）において、学内外のステークホルダーを巻き込む強力な装置として、大いに機能していくことになるでしょう。今後、物理的にも機能的にも「伊都キャンパスの結節点」として、ピリリと効いたスパイスのような存在になることを目指していきます。

❶図書館側からのアプローチ／2020年10月
❷建設途中のフジイギャラリー／2020年6月
❸建物引き渡し時のG2（高天井の展示室）／2020年10月

幻の2020年度公開展示

岩永省三　一次資料研究系・教授

2019年5月に、大野城心のふるさと館の赤司館長から、2020年夏の企画展及び長期的な展覧会等での協力依頼を受けた。大野城市と九大が2019年3月に締結した連携協定に基づく事業である。当館は創設以来大きな展示場を持たず学外施設を借りて大掛かりな展示を実施してきており、学外の博物館・美術館との連携を進めていることから、協力することにした。2020年夏の企画展では九大の貴重な学術標本を子供向けに分かり易く紹介する展示とイベント各種を行うこととし、10月から当館教員が数回に分けてふるさと館の現地を確認して展示計画を練り上げた。

1階展示ブースには会場への導入として見栄えのする標本を置き、歴史的什器で「帝大教授の研究室」を再現。2階ブースには九大の歴史を示す構内出土食器、鉱山・鉱業関連資料を展示するとともに、「科学の基礎は観察から」と題し精密な科学描画各種を展示。3階ブースでは植物標本と動物骨格標本を展示し、メイン会場の『博物の森へようこそ』では、きらめく鉱物群、昆虫標本、動物交連骨格標本、動物剥製、化石、貝類など当館選り抜きの資料を並べる。2020年1月から新造する展示ケースや造作物の発注準備を進め、基本設計業者、展示品輸送業者を決める段階まで進んだが、新型コロナ禍により、5月上旬に中止と決定された。誠に残念であったが、将来、大野城市との連携事業が復活することを切望している。

❶大野城心のふるさと館での下見の様子

展示協力

広田遺跡ミュージアム5周年記念展示

広田人と貝装飾

― 広田遺跡出土品里帰り展 ―

米元 史織　開示研究系・助教

広田遺跡ミュージアムは、鹿児島県種子島の南種子町にある弥生時代後期後半から古墳時代併行期（3世紀から7世紀頃）にかけての集団墓地である広田遺跡の隣接地に建設された博物館です。2008年（平成20年）3月28日、広田遺跡が国の史跡に指定され、2015年3月1日に開館しました。広田遺跡は、1955年9月に襲った台風22号の潮害によって、海岸に散乱していた人骨を広田部落の長田茂氏が発見、その後九州大学の教授らによって発掘が行われ、九州近海には生息しないゴホウラやイモガイなど南海産の貝を利用した貝製品が多数副葬されていたことや、貝府の文様が中国系のものであることから、この時期の南東や大陸との交流を考える際に極めて重要な遺跡とされています。この遺跡からは157体の古人骨が出土し、発掘・調査を行った関係で古人骨は現在も当館に所蔵されています。今回、ミュージアムの設立5周年を記念して、発掘が行われた1957～1959年以来初めて、当館所蔵の古人骨が広田遺跡に里帰りすることになりました。展示期間は10月24日～12月20日と、新型コロナウイルス感染症が流行している最中での展示となってしまいましたが、発掘当時を知る島民の方々を含め、多くの関心を呼んだ展示となったようです。

※写真は南種子町教育委員会提供

COLUMN❶

理学部エントランスホールの“オール・アンモナイト”展示

伊藤 泰弘　開示研究系・助教

伊都キャンパス理学部エントランスホールに九州大学“オール・アンモナイト”プロジェクトを紹介する展示をしています。このプロジェクトは、当館の前田晴良教授が2018年のクラウドファンディングで開始、世界各地のアンモナイト化石を収集するものです。これまで箱崎の博物館化石閲覧開示室で展示していましたが、伊都キャンパスでもその一部を展示しました。今回は、九州大学大学院OBで東京大学名誉教授の棚部一成先生より本プロジェクトに寄贈いただいたアークトセラスをはじめ、アメリカ、イギリス、マダガスカルのアンモナイトを紹介しています。現在、クラウドファンディングの募集は終了しましたが、前田教授の飽くなき収集活動は続いております。

元専門研究員より

九州帝国大学農学部資料整理を契機として

永井 リサ　帝京大学専任講師・九州大学総合研究博物館協力研究員

2015年10月からこちらの博物館の専門研究員であった永井リサと申します。私は今年度から帝京大学経済学部で専任講師として環境史等を教えております。ここの専門研究員から常勤講師になるまでの経緯が「紆余曲折あって面白い」という声をいただきましたので、少しお話しさせていただきます。

私は学部時代、文学部で中国史を勉強しておりました。それで大学3年時に短期留学した中国山西省で、緑被率3%でほぼ砂漠状態、夏なのに草木一本無いという風景に衝撃を受け、中国の森林減少過程を歴史的に検証したいと考え、九州大学比較社会文化研究科（現地球統合科学府）の修士課程に進学し、戦前中国東北地域森林開発過程の研究を始めました。しかし博士課程在籍中に結婚・出産したため博士号を取得しないまま満期退学し、その後は松下財団の研究助成を取得して1歳の子供を夫に預け、吉林大学東北アジア研究所に研究留学致しました。帰国後は大阪大学経済学研究科で特任研究員となり、阪大での任期終了後また中国に戻り、大連大学日本言語文化学院で日本語教師として日本語を教えておりました。

大連大学での2年目、休暇で帰国する際を利用し、移転作業中であった旧中央図書館の戦前九州帝国大学農学部の資料整理をお手伝いすることとなり、九大の植物標本コレクションを形成した一人である林学者・金平亮三の関連資料を整理したことがきっかけで、専門研究員に推薦いただきました。

2015年10月よりこちらの専門研究員となり科研応募可能な「研究者番号」を得たため、同年秋に科研費を申請したところ、萌芽研究「日本帝国と草原 ― 20世紀初頭における内モンゴル東部草原からの有機物流出過程の検証（16K13125）」に採択されました。2017年春に帰国し、専門研究員の傍ら日本語学校で日本語教師として働きつつ博物館で資料整理作業を続け、学会や国際シンポジウムで報告する中で研究を評価していただけるようになり、2020年4月から帝京大学で常勤講師として勤務することとなりました。

私はこのように非常勤や任期職を繰り返してきましたが、専門研究員として研究者番号をいただけたことが契機となり専任講師になることができました。家庭の事情で研究継続が難しい方でも「僅かでも続けていく」ことによって次が拓ける可能性は十分あると思います。

❶大連大学正門入口
❷旧中央図書館での農学部資料整理時に出てきた貴重資料（金平亮三の個人アルバム）。
❸帝京大学八王子キャンパス中央「SORATIO SQUARE」6階にある学生食堂「ソラティオキッチン」のガパオライス。22階建の校舎は、周囲を見渡せる絶景スポット。

COLUMN❷

超大型アンモナイト化石公開！

前田 晴良　分析技術開発系・教授

直径80cm、重量100kg 越えの超大型アンモナイト化石：*Mesopuzosia pacifica* を新たに公開します（写真）。この化石は北海道の白亜紀後期の地層から2000年6月に発掘されました。本種は1954年に故・松本達郎博士により命名記載され、ホロタイプは本館に保管されています。しかし、それは直径約10cmの未成年殻で、大型の成年殻ではありません。今回、三笠市立博物元館長の長谷川浩二氏の計らいで、非常に保存の良い超大型標本（成年殻）が本館に収蔵されました。縫合線が見事です。COVID-19が収まったら、来館者が手で触れることができるオープン展示で公開しますのでお楽しみに。

※写真は新公開の超大型アンモナイト

退任に寄せて

博物館長退任のご挨拶

総合研究博物館第8代館長　緒方 一夫

2017年4月より吉田茂二郎館長の後を継いで2期4年を務めさせていただきました。この間、九州大学は移転完了の大事業があり、私としては博物館の拠点となる建物の課題がいつも頭にありました。そこで、大学執行部に対して窮状を訴えるというより、九大博物館のすばらしさを理解していただくという戦略をとってきました。

博物館長に就任した同時期には副学長と熱帯農学研究センター長も兼任していたので、頭の切り替えが大変でした。とはいえ、大学の総合研究博物館としての役割や位置づけが、兼任しているが故に見えてくる部分もありました。例えば、大学全体の研究・教育・社会連携などの動向、国際・広報・施設整備の現状などを踏まえた上での、博物館の運営です。博物館の先生方は展示のセンスがよく、語りもうまいと感心しています。その魅力を外部ばかりではなく、大学内部にも向けることでプレゼンスも上がり、学内の展示やイベントでは「そうだ、博物館に頼もう」という動きも増えた気がします。

4年間を振り返れば、2017年に伊都分室が開設され、伊都キャンパスでの活動の拠点が築かれました。2018年の1月には丸1日を費やして内部ブレーンストーミングを行い、博物館の課題を整理しました。4月以降よりキャンパス移転に伴う旧工学部本館への標本の集約を開始、12月には「本館丸ごと博物館」ツアーなど、展示が強化され、2件のクラウドファンディングなど新たな試みも行いました。

2019年には国立台湾大学博物館群（NTU）との交流、2020年にはグラスゴー大学ハンタリアン博物館との交流など、国際化を視野に入れた活動を促進、フジイギャラリー建設協力など、施設の拡張も行いました。

一方、2020年はコロナ禍により、数々の企画が中止となり、本館の公開も中止が続いています。しかし、設立20周年記念コンテンツはWeb上で公開され、先生方の研究・教育も行われています。移転後の旧工学部本館や旧事務庁舎のある箱崎跡地は「箱崎サテライト」という名称で、九大の資産として残ること、博物館はその中心的役割を担うという方向性が明らかとなりました。今後もますますの発展を期待します。

❶2017年7月27日博物館のみなさんと暑気払い
❷2018年1月14日ブレーンストーミング
❸2019年12月19日九大-NTUコロキアムにて

COLUMN❸

『神秘の昆虫 ビワハゴロモ』を出版

丸山 宗利著／エクスナレッジ社／2020年12月28日刊行

丸山 宗利　一次資料研究系・准教授

このたび、世界初となるビワハゴロモという昆虫の図鑑を出版しました。昔から好きな昆虫で、10年ほど前から図鑑作ろうと思い、本格的に収集を開始しました。一部に当館所蔵の烏山邦夫収集標本も用いています。日本にいないので、一般になじみのない昆虫ではありますが、2016年に当館で「空飛ぶ水彩画 ビワハゴロモ」を行ったので、ご記憶の方もいらっしゃるかもしれません。この展示タイトルのとおり、水彩画のような色彩で、驚くほど美しい昆虫です。図鑑とはいえ、写真集としてもお楽しみいただけます。機会がございましたら、本書をお手に取っていただけると嬉しいです。

退職に寄せて

移動から定住へ

― 九大博の20年 ―

岩永省三　一次資料研究系・教授

①

②

私は2021年３月で定年退職し20年間勤めた九大博を去ります。この間同僚諸氏を始め多くの方々にお世話になり篤く御礼申し上げます。退職の挨拶として 20 年間を振り返るよう依頼されました。「雑芸員」を自認し博物館内の様々な仕事を一通りこなしてきましたが、ひたすら資料の「引っ越し」していた気がします。

考古学者の私が「移動から定住へ」などと書くと、採集狩猟民から農耕民への生業変化に伴う居住形態変化の話みたいですが、「流浪の民」九大博の歴史物語です。

222㎡からの出発

当館は 2000年4月に創設されましたが、その時点での使用面積はたったの222㎡でした。当時の箱崎地区は伊都への移転開始前で、新組織が借用できる空き部屋などほとんど無かったからです。教員居室は旧工学部図書館裏手の印刷所、事務は理学部等事務部、実験室は旧法文系建物、展示室は創立五十周年記念講堂２階の一画を借りて出発しました。しかし博物館の心臓部ともいうべき学術標本・資料の収蔵施設は**0**㎡で、ここから収蔵室確保のための長い旅が始まりました。

第一分館の誕生

2004年に第一期移転として工学部が伊都に移転し始め、箱崎地区内に空き建物ができてきました。2004年４月に医学部にあった古人骨･獣骨資料の比文から博物館への移管・移転が打診され、移転先が旧知能機械工場２階（500㎡）と決まり、9･10月に移転作業を行い、はじめて大きな収蔵室を持てました。

2007年１月に、六本松地区の移転に伴い、図書館にあった旧玉泉館考古学資料の博物館への移管が決まり、2008年９月に旧知能機械工場１階に移転し、工場全体を「第一分館」と命名しました。その後、主として考古学関係の資料と、移転に伴って収集を始めた歴史的木製什器を納め、当館の主要収蔵施設となりました。第一分館裏手の工場建屋は、残置された歴史的工作機械が林立する独特な雰囲気で、その後、各種のイベントや展示に活用しました。また、2008年1月に病院地区からカルテ資料16万冊を旧工学部４号館（第二分館）に移転しました。

この間、2007年３月に旧工学部本館（以下、本館）の１～３階の一部の教員研究室・事務室等としての使用が認められ、

❶ 筆者近影
❷ 博物館第一分館
❸ 第一分館から第三分館へ
❹ 記念講堂から本館へ
❺ 本館への引っ越し作業中

10月から使用開始しました。2008年3月に本館9番講義室の常設展示室への改修工事を行い、5月から一般公開を開始しました。こうして、教職員の居場所は定まったのですが、資料たちの旅は続きます。

第一分館の解体⇒第三分館の誕生

工学部の移転で空いた建物の解体・更地化がどんどん進み、とうとう2015年中の第一分館解体が決まり、2014年9月から資料移転の準備を初め、統合移転推進課が示した場所―旧保存図書館・本館地下・旧工学部5号館―での移転先を決めました。2015年7月から移転先の改修工事を行い、10～11月で移転を完了し、旧保存図書館1階を「第三分館」と命名しました。本館地下には考古学資料等、旧5号館には工作機械等を納めましたがふだんは公開しないので、人骨資料・脊椎動物骨格標本・高壮吉鉱物標本を収蔵展示する第三分館が、しばらくの間、当館の主要公開施設となりました。

第三分館の解体⇒本館への集約

2015年以降、理学部・農学部・文系地区も順次移転準備が始まりました。大学からは旧工学部施設（博物館第三分館、五十周年記念講堂・旧工学部3号館・4号館（博物館第二分館）・5号館）、理学部・農学部に散在する博物館関係資料を本館に集約する方針が示されました。ただし、箱崎から退去予定の博物館の総面積は4000㎡以内と厳しく決められており、それを超えない範囲で、本館内のすでに空いている部屋や今後空く部屋に順次資料を移転することとし、2017年10月から移転先の検討を開始し、2018年9～10月に移転を行いました。こうして念願だった本館への資料集約ができ、「本館まるごと博物館」としての活動を始めました。

本館からの退去 ― 再び流浪の旅か？？

しかし、2020年度末で本館は更地になった校地とともに売却される予定で、我々は再び流浪の旅に出なければならない、とずっと考えてきました。「賽の河原の石積み」みたいですね。しかし、2019年9月に明るい展望が開けて来て、それを聞いたうえで退職できるというのが、何にも代えがたく大変有り難い事です。

COLUMN❹

常設展示室に適切な換気のための換気扇がつきました

福原 美恵子　技術補佐員

新型コロナウイルス感染症対策として三密のうち「密閉」を避けるために定期的に外気を取り入れる換気の重要性が指摘されています。常設展示室は講義室であった来歴から窓が多く設けられており換気設備はなかったのですがこれを機に設置しました。換気扇をつけるなんてすぐでしょ？と思われるかもしれませんが、部屋の面積から取り付け数と位置を判断し、さらに建物の外観を損ねないよう施工いただく必要がありました。常設展示室がある旧工学部本館は1930（昭和5）年に竣工された古い建物であり窓の寸法もそれぞれに違っていたり、3階であることも重なって一筋縄には行かず苦労しました。事務手続きや作業に携わった方々に感謝いたします。現在は室内のCO_2濃度の経時データの可視化と共有も準備しています。

展示・講演会関係の活動状況
Activities of Exhibitions & Conferences

公開講演会

●九州大学総合研究博物館公開講演会
「博物の森より　言の葉の少し響みて」
演者○緒方一夫（九州大学総合研究博物館館長）、
岩永省三（九州大学総合研究博物館副館長）、
谷澤亜里（九州大学総合研究博物館助教）
日時○令和３年３月17日（水）
場所○九州大学箱崎キャンパス跡地旧工学部本館大講義室
（オンライン配信）
主催○九州大学総合研究博物館

協力

●「伊都キャンパス理学部エントランス展示
― オールアンモナイト」
期間○令和２年12月１日（土）～
場所○ウェスト1号館2階エントランスホール
共催○九州大学理学部

●広田遺跡ミュージアム開館５周年記念企画展
「広田人と貝装飾 ～広田遺跡出土品里帰り展～」
期間○令和２年10月24日(土)～12月20日(日)
場所○広田遺跡ミュージアム
展示協力○九州大学総合研究博物館、鹿児島県歴史・
美術センター黎明館
主催○広田遺跡ミュージアム

ラジオ出演

●NHK ラジオ第一放送と NHK ワールド・ラジオ日本
「冬休み子ども科学電話相談」・「子ども科学電話相談」
令和２年12月27日(日)
令和３年２月７日(日)
（丸山宗利准教授）

その他の活動状況
Others

運営委員会

●運営委員会
令和２年10月27日（書面）
令和２年11月16日（書面）
令和２年12月25日（Web）
令和３年 １月21日（書面）

人事往来
Personal Changes

着任

令和３年10月１日付けで、
専門職員の大坪豊和が着任しました。

退職のご挨拶
Farewell greeting

2018年５月から約３年間、博物館で研究を行うとともに、資料の管理や展示などの様々な活動に携わってきました。この『博物館ニュース』の編集も楽しく担当してきましたが、次号から編集担当が交代します。博物館には学生時代から本当にお世話になり、キャンパス移転の様子も間近に見てきましたので、旧工学部本館への資料の集約と20周年記念事業に自身が携われたのはとても感慨深いことでした。これからの博物館の益々の発展をお祈りしつつ、私も新天地で頑張りたいと思います。

谷澤 亜里　開示研究系・助教

2016年４月から５年間、事務職員として博物館を担当しました。それまでは大学図書館に勤務していましたが、博物館が扱う資料については知らないことばかりでした。しかし、2018年のキャンパス移転に伴って、箱崎地区旧工学部本館に博物館標本・資料を集約した結果、その概要は理解することができるようになりました。今後、この標本・資料を活用した九大博物館の研究・教育・展示活動が大きく発展することを願っています。

益森 治巳　事務職員

▶総合研究博物館では、『博物館活動充実基金』として皆様からのご寄付を受け付けています。

振込用紙での手続きを希望される方

1. 当館 HP に掲載の寄附申込書（博物館活動充実基金用）にご記入ください。
2. 事前に博物館事務室までご連絡頂ければ、申込書記入内容の確認をいたします。
3. 寄附申込書原本を、博物館事務室までご郵送願います。
4. 入金依頼書をお送りいたしますので、同封の振込用紙により納入してください。
5. 入金確認後に、御礼状と「寄付金領収書」をお送りさせていただきます。寄付金領収書は税法上の優遇措置に必要ですので、確定申告まで保管して下さい。

※当基金への寄付金は、所得税、法人税、相続税、住民税（自治体により異なります）の優遇措置をうけることができます。

webでのお申込み・クレジットカードでの決済も可能になりました。詳細は当館ホームページもご参照ください。
http://www.museum.kyushu-u.ac.jp/information/museumfund.html　九大博　充実基金
お問い合わせ先：総合研究博物館事務室／電話●092-642-4252／メール●office@museum.kyushu-u.ac.jp

編集○谷澤 亜里　デザイン○UNIZON　発行○九州大学総合研究博物館　〒812-8581　福岡市東区箱崎 6-10-1　TEL 092-642-4252　website○http://www.museum.kyushu-u.ac.jp
印刷○城島印刷株式会社　〒810-0012　福岡市中央区白金 2-9-6　TEL 092-531-7102　FAX 092-524-4411　発行日○令和３年３月23日
©2021 The Kyushu University Museum